



雨上がりの虹の架かるバンクーバー市街



大会会場のVancouver Convention Centre (East Wing) が位置するCanada Place



CINP Japan Nightの会場 (Ballroom Crystal Pavilion, Pan Pacific hotel) 内の様子



JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014の受賞者 (筆者は右から二番目)

西澤 大輔

(公財) 東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Associations of the orexin (hypocretin) receptor 2 gene polymorphism 1237G>A (Val308Ile) with nicotine dependence found in genome-wide and following association studies

コメント

この度、カナダのバンクーバーにおいて開催された29th CINP (Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum) World Congress of Neuropsychopharmacology (会長 Anthony G. Phillips先生) の学会大会に参加しました。今回の大会は、私個人としては、2012年のストックホルムでの大会に引き続き、二度目の参加となりました。学会の初日に開催された (Receptionを含む) Opening Ceremonyの直後 (実際には途中の時間から) においては、別会場にて、日本人参加者を中心として「世界の精神神経薬理分野において、日本のNeuropsychopharmacologyの臨床研究者・基礎研究者が一体となって、All Japanとしてリーダーシップをとって推進するための懇親を目的とする」CINP Japan Nightのパーティーが今回も企画され、その中でJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014の授賞式が行われました。私は前回の大会に引き続き、このような名誉ある賞を頂くことが出来まして、大変光栄に思います。そこで、雑駁になってしまいますが、大会自体についての感想、並びに授賞式を含めたCINP Japan Nightの感想を述べさせていただきます。幾らかでも、本大会をあまりご存知でない方、また、本大会のような国際学会に関心のある方などの参考になれば幸いです。

まずは、大会とは関係の無い余談ですが、旅行の準備段階において比較的安価な航空券を購入した私は、日本からの直行便ではなく、香港経由の乗継便の飛行機でバンクーバーに向かうこととなりました。ところが、飛行機の離陸のための準備が遅れたという理由であったかと思いますが、成田空港を1時間程度遅れて出発することになってしまいました。香港での乗継の時間は1時間半程度の予定でしたので、何とか乗継ぐことができるかと思い、香港国際空港に到着後、足早に乗継の方のゲートに向かいましたが、途中の壁に、私の名前が書かれたメモが掲示されており、その横に係員が立っているを見つけました。話を聞いてみると、「これから乗継便に乗るのは無理なので、別の便に乗ってください」とのことでした。航空会社の都合でフライトが遅れたにも関わらず、勝手に別の便に変更させられ、その便は、何と予定していた便よりも8時間程度も遅い便でした。というわけで、やむを得ず空港で8時間程度の中途半端な時間を過ごすことになってしまいました…。旅行にトラブルはつきもの、とは言われますが、学会参加のための旅行に関しても同じです (国際学会は旅程が長いこともありトラブルに遭う確率は上がると思います)。国際学会は慣れていない方は、(私のようなトラブルを他山の石として、) 余計に気をつけられると良いかと思いますが (本人が充分注意しても外因性のトラブルに遭う可能性もあります)。

さて、今回の大会が開催されましたバンクーバーは、私は初めて訪れましたが、街並みは、やはりアメリカに似ているように思いました (図1)。会場は



足田 貴俊

京都大学大学院 医学研究科 メディカルイノベーションセンター

研究課題、タイトル

Pathway-specific modulation of nucleus accumbens in reward and aversive learning behaviors and drug addiction via selective transmitter receptors.

コメント

2014年6月22日から26日にかけてバンクーバーで開催されました第29回国際神経精神薬理学会(29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2014)に参加いたしました。国際神経精神薬理学会に参加しますのは今回が初めてでしたが、精神神経薬理のトピックを、基礎薬理学から臨床での問題点に至るまで幅広くおさえることができました。特に統合失調症や認知症に限らず、うつ病をはじめとしたさまざまな精神疾患の認知障害をどのように治療の対象とするかが、臨床からと動物実験からでそれぞれ議論されており、今後のトランスレーショナルリサーチへのひろがりを感じました。精神疾患における腸内細菌環境と脳機能といった気になっていたトピックにもふれることが出来ました。旧友のジョンズ・ホプキンスのPletnikov博士やマウントサイナイのRusso博士のシンポジウム講演を聴けたことも大変刺激になりました。

今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014を受賞いたしました。この場を借りまして、御礼申し上げます。今後の精神神経薬理に貢献できますよう研究を進めて参ります。



会場のコンベンションセンターから眺めた夜9時のバンクーバー湾。6月下旬、北緯49度のバンクーバーの日の入り時刻は21時を過ぎており、この時間でも外は薄らと明るい。時差ぼけとは違った、不思議な時間の感覚に襲われる。

荻原 英雄

藤田保健衛生大学

研究課題、タイトル

Retrospective prediction of behavioral state by hippocampal transcriptome of the mice showing infradian rhythm

コメント

この度、ポスター発表演題におきまして、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014を受賞しましたことを大変光栄に存じます。日々の研究成果がこのような賞に繋がり大変嬉しく感じています。ご指導ご鞭撻を賜りました皆様、学会関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、今後とも研究に邁進していきたいと考えております。

私は今回、CINP大会に初めて参加いたしました。ノーベル賞受賞者であるBrian Kobilka教授の講演も拝聴でき (<https://www1.cinp-congress.org/guest/ID35da8943110cb9/AbstractView?ABSID=11277>)、大変有意義に過ごすことができました。Kobilka教授は、Gタンパク質共役型受容体 (GPCR) の一種であるアドレナリン受容体の構造解析や機能解析などの一連の研究によって、2012年にRobert Lefkowitz教授とともにノーベル化学賞を受賞されました。GPCRを介したシグナルは、様々な細胞においてその正常な機能の発揮に重要な役割を果たしており、かつ、その異常は多くの疾患に関与していることが知られています。現に、これまでに開発された医薬品の少なくとも3割はGPCRを標的にしているとされています。精神疾患領域においても、例えば、ハロペリドールやクロザピン、リスペリドン、クエチアピン、オランザピン、アリピプラゾールなど、GPCRファミリーに属するドーパミン受容体やセロトニン受容体などに作用することが知られている薬が多くあります。現在の創薬研究においてもGPCRシグナルは重要なターゲットのひとつであるということを製薬企業の方からもお聞きし、まさに創薬研究の礎となる研究であると思いながらKobilka教授の講演を拝聴しました。

今大会は臨床研究やトランスレーショナル研究についての演題がかなりの割合を占めており、普段、基礎系の学会に参加している私にとっては、臨床研究の現状を知ることのできる貴重な機会でありました。それと同時に、いかにして成果を社会に還元していくか、という視点を持って研究を行うことの重要性を改めて認識できた学会でした。

佐藤 敦志

東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Tsc2 haploinsufficiency is associated with the more severe autism-related behavioral deficits in mouse models of tuberous sclerosis complex

コメント

2014年6月22日から26日にカナダ・バンクーバーで開催された29th CINP World congress of Neuropsychopharmacology (CINP2014)に参加いたしました。CINP2014ではJSNP Excellent Presentation Award for CINP2014を受賞させていただき、誠に光栄に存じます。

今回、はじめてCINPへの参加となりました。6月のバンクーバーは上着を用意していくとよいでしょうとのことでしたが、空港に降り立ってみると、特にその日は天気がよかったのか、カラッと晴れたすがすがしい初夏の陽気でした。空港前から電車に乗り、見晴らしのよい車窓をぼんやり眺めながら、これが空港からバンクーバー市街地へのアクセスを劇的に改善したのだろうかと思像しました。海外の学会という、到着早々にタクシーをつかまえて行先を伝えたものの、本当に着くか不安になることが多いのですが、今回は若干リラックスした気がします。

オープニングセレモニー後のJapan Nightでは、国内外のご高名な先生方をはじめ、100人を優に超える参加者があり、改めて日本からの参加者の多さと、CINPにおける重要性が感じられました。私はお手伝いとして受付にいたり、1階で道案内をしたりしていました。ご招待を受けた海外の先生（残念ながらお名前を失念してしまいました）がご夫妻でお見えになり、「盛大な会にお招きいただき光栄です」と、道案内の私へお礼の言葉をかけていただきました。その間に受賞者の写真撮影が終わっていたのですが。

もともと小児科医なので精神科領域の話題に触れることが少なく、臨床も基礎も広く扱うCINPの内容は、ほかの参加者の先生方が感じる以上に斬新でした。私の発表はmTORと自閉症の関連についてでしたので、それに関係するセッションを拝聴しました。ひとつはケタミンの薬理作用についてで、その抗うつ作用がmTORの活性化（自閉症やてんかんとは逆）を介することやその機序について最新の知見が盛りだくさんでした。もうひとつ、mGluRをターゲットとした精神神経疾患の治療に関するシンポジウムも拝聴しました。この領域の研究が臨床でも盛んであることは知っていましたが、思ったような治療効果がなかなか示されず薬物開発が進まないなど、厳しい現状を知ることになりました。都合により最終日を待たずに帰国しましたが、興味を惹かれる話題が目白押しで非常に刺激になりました。

最後に、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2014の受賞につき、ご指導いただきました先生方に深く御礼を申し上げます。大学院を卒業後は小児科の臨床現場に戻っており、これまで以上に研究に精進することは難しいのですが、いま研究に日々取り組んでいる先生方とともに、ソウルで行われる次回のCINPが盛大な会となるよう僅かでも協力できればと思います。

石渡 小百合

東京医科歯科大学 精神行動医学分野



会場近くの風景



オープニングセレモニーでのライオンダンス

研究課題、タイトル

Changes in extracellular contents of D-serine and D-serine-NMDA receptor-associated amino acids by selective suppression of serine racemase expression in forebrain glutamatergic neurons.

コメント

2014年6月22日から26日にカナダ・バンクーバーで開催された 29th CINP World congress of Neuropsychopharmacology (CINP2014) に参加しました。バンクーバーは都心にも関わらず、海や山がすぐ近くにあり自然と一体化した美しい街でした。意外だったのは、想像していた以上にアジア系の人々が多いことです。チャイナタウンもあり、オープニングセレモニー時にもライオンダンス (中国式獅子舞) が披露されました。今回の学会期間はFIFAワールドカップ開催期間と重なったこともあり、カナダでも、レストラン等の至る所で試合を観戦している人達が見受けられました。学会会場でご覧になっている先生もいっしょに、その方達は不思議な一体感を醸し出していました。その様子を見ながら、CINPは2年に1度の開催ですが、さながら神経精神薬理界のワールドカップのようなものだろうか、と考えました。一番を競い合うようなものではありませんが、全世界からその分野の代表者や若手が集まり、人種や年齢を超え真剣に議論していく姿、そして、本学会が今後この分野の方向性に影響を与えること、等通じるものがあるのではないかと感じました。

私には、今回の学会で特に楽しみにしていたことが二つありました。一つは、D-セリンに関するシンポジウムです。『Neuron-glia interaction in schizophrenia :Focus on D-serine』というタイトルで開催されたシンポジウムではD-セリン研究の中心を担っている、普段論文を通してしか知ることができない先生方の、最新の研究成果や考え方等を直接聞くこと、また、ディスカッションすることができ、とても刺激になりました。中でも、wolsker先生のASCT-1KOマウスの報告は印象的でした。これまで薬理的にD-セリンの取り込みはASCT-2、Asc-1が関係していると考えられてきましたが、ASCT-1KOマウスでD-セリン量が減少する、という報告には驚きました。また、Pletnikov先生による、『神経特異的DISC1欠損マウスにおいてはD-セリンやセリンラセマーゼレベルに大きな変化がない』、という報告も新鮮でした。同じ物質に関心を持っていても、様々な視点からのアプローチがあること、しかし、この物質の謎を解き明かし精神疾患の病態解明そして治療にどうにかして役立てたい、という気持ちは皆が同じであることを強く感じる事ができたシンポジウムであったと思います。私自身も興奮して、不慣れな英語で質問してみました。私の質問を受けた先生は意図を読み取りにくそうでしたが、どうか伝わり、解答して下さいました。伝えたいことの半分も伝えられなかった自分の英語力の未熟さを痛感すると同時に、もっと頑張ろう！と思えた貴重な経験でした。

また、Karl Deisseroth先生によるプレナリーレクチャーも楽しみの一つでした。プレナリーホールのスクリーンに映し出されたCLARITY画像は衝撃的な美し

さでした。

今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP2014を授与されましたことを大変光栄に、そして嬉しく思います。日々、ご指導ご鞭撻を頂いた皆様、学会関係者の皆様にご場をお借りして深く御礼申し上げます。私をはじめCINPに参加したのは、博士課程在籍時、2年前ストックホルムで開催された28th CINPでした。その際、初めてこのawardの存在を知り、自分もいつか受賞したいな、と考えていましたが、今回、この賞を頂く事ができ、当時の気持ちを思い出して、改めて気持ちを引き締めることができました。

今後、今回の経験を糧に、神経精神薬理の発展に貢献できるよう、日々研究に精進していきたいと思っております。



早田 敦子

大阪大学大学院 連合小児発達学研究所 附属子どものこころセンター

研究課題、タイトル

PACAP-PAC1 signaling pathway regulates internalization of serotonin 2A receptor in a PKC and β -arrestin2 dependent manner

コメント

2014年6月22日(日)より26日(木)にわたり、カナダ・バンクーバーにて開催されました第29回国際神経精神薬理学会（CINP2014）に参加致しました。学会の様子など報告させていただきます。

CINPへの参加は、前回のストックホルム大会に続き2回目になりますが、今回、研究室内からただ1人での参加となり、不安でいっぱいのまま出発いたしました。しかし、初日にJAPAN Nightが開催され、お手伝いとして受付を担当したことにより、様々な先生方と知り合いになり、研究内容の話のみならず、研究者としての姿勢や考えを学ぶ機会を得ることができました。さらに、日本の6月の高温多湿の気候と異なる涼しく澄んだバンクーバーの気候と学会会場もあるベイエリアの美しさに魅了され、大変有意義な時間を過ごすことができました。普段、学会期間中は同じ研究室内の先生方と行動を共にすることが多かったのですが、その態度を見なおす必要があると反省いたしました。

神経精神薬理学会は、臨床と基礎研究の両方の発表があるため、私が普段参加する基礎系学会では聞けない臨床の発表も多く拝聴し、また、ポスターでは拙い英語ながらいくつか質問することもでき、大変勉強になりました。2日目のJapanese sessionでは立ち見が出るほど聴衆が多く、統合失調症の最新の知見も含め大変興味深い内容が目白押しで、大成功のsessionだったのではないかと思います。中でも、廣井昇先生の統合失調症・自閉症マウスモデルである22q11.2 CNVマウスの講演では、マウスの社会的コミュニケーションの一つである超音波発声に多くのバリエーションがあり、実際に1つずつ超音波発声の違いを聞かせながら発表をしていただき、判り易く私にとって印象的な内容でした。

自身のポスター発表は、まだまだ英語が未熟で課題であると痛感しましたが、数名の先生方とディスカッションさせて頂き、とても有益な助言を頂きました。ただ、会場ではポスターが貼られていない発表もいくつか見られ、発表者から直接話を聞くことができなかったことや、日を追うごとにやや閑散としていたことが、非常に残念に思いました。

今回、ポスター発表演題におきまして、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014を受賞しましたことを誠に光栄に存じます。ご指導ご鞭撻を賜りました皆様、学会関係者にこの場を借りて感謝申し上げます。日々精進して、研究に邁進していきたいと思っております。



Japan NightにてAnthony G. Phillips先生
(中央)、鍋島俊隆先生(右)と

宇野 恭介

富山大学大学院医学薬学研究部(薬学)薬物治療学研究室

研究課題、タイトル

PCLO SNP rs13438494 regulates DA and 5-HT uptake, accompanied with splicing efficiency and dependence-like behaviors in genomic association studies

コメント

2014年6月22日から26日までカナダのバンクーバーで開催されました第29回 国際神経精神薬理学会CINP World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加いたしました。また、今回JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

私にとっては人生2回目のCINPへの参加で、学生時代の2008年ミュンヘン大会以来の参加でした。バンクーバーで開催されたCINP2014は今大会長であるAnthony G. Phillipsブリテッシュコロンビア大学教授の地元であり、学会場であるバンクーバーコンベンションセンターは2010年に開催された冬季五輪にてメディアセンターとして利用された建物で、オリンピックで利用された表彰台やメダルのレプリカなどからその名残を感じ取ることができました。6月下旬のバンクーバーは日本のじめじめとした空気とは違い涼しく澄んだ過ごし易い気候で、会場周辺のベイエリアから眺める対岸の山々の緑と海の青と空の青が写真のようでなんと清々しいものでありました。

臨床研究と基礎研究の発表があるCINPは、日常基礎研究ばかり追いつめていた私にとってはとても斬新なものであり大変勉強になりました。今回私は双極性障害についての発表をさせていただきましたが、主に現在研究を行っている統合失調症のセッションを聴講させていただきました。中でもJapanese session ではハーバード大学のMeltzer先生をはじめアインシュタイン医科大学の廣井先生、大阪大学の橋本先生、大塚製薬の菊地先生が講演され、立ち見が出るほどの盛況ぶりでした。

今回はオープニングセレモニー後に開催されたJapan Nightでは上述の諸先生方を始め120名ほどの参加者がありました。私は受付を担当させていただき、受賞者の写真に写りこむことは適わなかったのですが、論文上ではか尊名を存じ上げない先生方と少しでも会話することができたのは大きな収穫であったと思います。中でもAnthony G. Phillips先生とは写真までとらせていただきました。このような機会を設けていただいた山脇先生にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

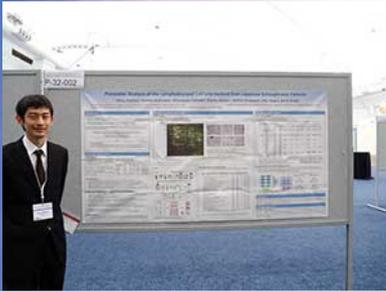
自身のポスター発表では共同研究者に名を連ねる先生の甲斐あってか多数の先生方とディスカッションさせていただき有益な情報を多数いただきましたが、自分の英語力の未熟さを痛感させられ、これもまた大きな課題であると認識させられました。

学会全体を通してですが6年前に比して規模の縮小さを痛感いたしました。ポスター発表の数もですが、口演会場も小さかった気がいたします。次回はソウルにて開催されますが、盛大な会となるよう自身も若輩ながら協力させていただければと思います。

末筆となりましたが、JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを誠に光栄に思います。常日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました皆様、及び学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を糧に日々精進して参りたいと思いますので今後ともよろしくお願い致します。

吉見 陽

名古屋大学大学院 医学系研究科 精神医学分野



研究課題、タイトル

PROTEOMIC ANALYSIS OF THE LYMPHOBLASTOID CELL LINE DERIVED FROM JAPANESE SCHIZOPHRENIC PATIENTS

コメント

第29回国際神経精神薬理学会（29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2014）がブリティッシュ・コロンビア大学精神科教授でCINP前理事長であるAnthony George Phillips先生を大会長として、2014年6月22日（日）から26日（木）の5日間にわたり、カナダ・バンクーバーのコンベンションセンターで開催されました。CINP2014では日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP2014を授与いただきまして誠に光栄に存じます。ご指導賜りました先生方並びに学会関係者様にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。参加致しました学会の様子についてご報告させていただきます。

会期中は大きな天候の崩れもなく程よい気候に見舞われ非常に過ごしやすく、会場では多くの参加者の熱気に包まれていました。CINPへの参加は初めての経験で、特に印象的だったのは日本からの参加者が多く、初日のCINP2014 Japan Nightには総勢約120名もの神経精神薬理学者が一堂に会して懇親を深める機会があり、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

本大会は基礎研究と臨床研究に加え、両者を橋渡しするトランスレーショナルリサーチの成果報告があり、研究者の間では双方向性のアプローチについて様々な視点から活発な議論が交わされていました。Japanese SessionではHerbert Yale Meltzer先生がフェンシクリジン（phencyclidine; PCP）投与モデルの統合失調症様認知機能障害について、神経伝達機能の変化を薬理的に検討し、5-HT_{1A}部分作動作用、5-HT_{2A}、5-HT₇拮抗作用、GABA作動作用、弱いD₂拮抗作用が認知機能障害を改善することを報告しました。また、治療抵抗性を示す統合失調症患者の全ゲノム関連解析（genome-wide association study; GWAS）より同定されたtrace amine associated receptor 1 (TAAR1)の作動薬がPCP投与モデルの認知機能障害に効果を示し、新規抗精神病薬の標的としての展望について発表されていました。廣井昇先生はヒト染色体22q11.2のコピー数変異（copy number variants; CNV）の効果について、欠失領域や欠失サイズによりその効果が異なることを明らかにしており、筆者所属の研究室でも全ゲノムCNV解析を実施していることもあり非常に興味深く拝聴させていただきました。橋本亮太先生はヒト脳表現型コンソーシアム（Human Brain Phenotype Consortium; HBPC）の活用による脳機能とその分子基盤の新しい研究アプローチについて紹介され、GWASによる成果を発表されました。HBPCでは精神疾患患者の臨床検体（DNA、RNA、血清、リンパ芽球様細胞株など）の集積も行っており、貴重な研究資源と臨床情報のバイオバンクとしての機能が期待されま

す。菊地哲朗先生は製薬企業の立場で抗精神病薬の開発について実体験を踏まえて非常に分かりやすく発表されました。このJapanese Sessionに限らず、CINP2014のプログラムを総括すると、基礎と臨床、その橋渡しの研究成果を凝縮した構成となっており、神経精神薬理学者にとって非常に有意義なものであったのではないかと感じました。

筆者はリンパ芽球様細胞株のプロテオーム解析による統合失調症関連分子の探索を実施し、統合失調症と健常者の判別応用性についての検討を発表しました。精神疾患のバイオマーカー研究は国内外の関心事のようでシンポジウム（S-29 Clinically useful biomarkers in psychiatry: The promise and problem）は満席でした。オミックスアプローチにより様々な候補遺伝子・分子が報告されていましたが、バイオマーカーの同定・確認、解析法開発、臨床検体における確認、臨床現場での使用など、開発工程における多くの問題点が議論され、開発の重要性とともにその実現の困難さを実感しました。

本学会では自身の研究分野以外の発表に触れる機会がありとても多くの刺激を受けました。今後とも精神疾患の病態解明や診断法・治療法確立のため、日々精進し、社会に還元できる成果を目指して研究に励む所存です。

末筆となりましたが、JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを誠に光栄に思います。常日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました皆様、及び学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を糧に日々精進して参りたいと思いますので今後ともよろしくお願い致します。

岸本 泰士郎

慶應義塾大学医学部精神神経科学教室

研究課題、タイトル

Ketamine and Non-Ketamine NMDA Receptor Antagonists for Unipolar and Bipolar Depression: A Meta-Analysis

コメント

この度、私がCINPで発表いたしました、ケタミンおよび他のNMDA受容体拮抗薬による抗うつ効果のメタ解析（Ketamine and Non-Ketamine NMDA Receptor Antagonists for Unipolar and Bipolar Depression: A Meta-Analysis）に対して、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014を頂きました。誠にありがとうございました。

バンクーバーには初めて訪れましたが、水や緑が豊かで、湾には豪華客船が停泊し、水上飛行機が離着水する、美しく楽しいところでした。海岸の歩道は整備され、建築も素晴らしく、ジョギングをはじめて間もない私にとっては最高の場所でした。

学会はさすがCINP、世界各地から大勢の研究者が集まり、若干お祭り感に過ぎる印象もありましたが、興味深いセッションがいくつもありました。一方でR社のランチョンセミナーは、統合失調症の陰性症状への効果を期待して行われた治験が、Negative Studyに終わってしまったというもので、昨今、Pharmaceutical Giantsが中枢神経領域から撤退を表明している厳しい現実の一端を見ているのだろうと感じました。言うまでも無く新しい治療薬/法の開発は患者さんの予後をより良くするには必須で、業界が一団となって（治験方法の改善を含む）創薬を推進していく姿勢が必要だと感じました。微力ながら、精神神経薬理の発展に少しでも貢献できるよう精進して参りたいと思います。この度は誠にありがとうございました。



鳥海 和也

(公財) 東京都医学総合研究所・
精神行動医学研究分野統合失調症・うつ病プロジェクト

研究課題、タイトル

Effect of antipsychotics on telomere length in the hippocampus

コメント

2014年6月23日（月）から26日（木）にわたり、カナダのバンクーバーで開催されたCINP World Congress 2014に参加してきました。

バンクーバー国際空港まで成田から9時間。そこから市内へ直通の電車で40分程揺られ、会場のConvention centerに辿り着きました。この時期のバンクーバーは、日本のじめじめした梅雨とは打って変わって、カラリと涼しく、とても過ごしやすく快適でした。Convention centerは貨物船やタンカー、水上飛行機などがひっきりなしに行き交う、バンクーバー港に面しています。建物の脇には巨大な旅客船が停泊する船着場があり、時折鳴り響く汽笛の音が学会会場内にも届いていました。また、地下には、2010年に開催されたバンクーバー冬季オリンピックの表彰台、トーチ、メダルなどが展示しており、観光客が見学に訪れていました。

学会初日の夜は、JSNP主催のJapan Nightに参加させて頂きました。日本の多くの精神薬理分野の先生方に加え、CINP committeeの海外の著名な先生方と美味しい料理とお酒とともに交流を深める事ができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。特にCINP前会長であり、今回の大会長でもあったAnthony Phillips博士や、Herbert Meltzer博士とは直接お話する機会が持て、非常に有意義な時間を過ごすことができたと感じています。

本年会では、4日間の開催期間を通して、7つのプレナリーレクチャー、36のシンポジウムと基礎から臨床まで幅広いテーマが取り上げられ、どのセッションにおいても非常に活発な議論が行われていました。論文化されていないデータを発表している参加者も少なくなく、精神薬理学研究の最新の知見を得られ、非常に勉強になりました。特に印象深かったのはサーカディアンリズムと精神疾患に関するシンポジウムで、睡眠障害やうつ病、統合失調症への時計遺伝子群の関与や、近年新しいタイプの抗うつ薬として期待されるケタミンが時計遺伝子群の周期的な発現に与える影響などが報告されていました。その中でも特に、CLOCK遺伝子を発見し、現在でも分野を牽引するテキサス大学メディカルセンターのJoseph Takahashi博士の講演では、次世代シーケンサーを用いた経時的なRNA-seq解析や、時計遺伝子群のエピジェネティックな発現制御など、緻密で膨大なデータに圧倒されるとともに、自らの研究にも活かせるような技術や知識など豊富で、とても勉強になりました。

自分の発表では、基礎研究者だけではなく、国内外の臨床研究を行う医師や研究者がポスターを訪れ、多くの質問や提案を頂きました。指摘された点はどれもとても参考になり、異なった観点から自分の研究の新たな可能性を模索する良い機会であったと感じています。また、ミュンヘン大学

精神科のHans-Jurgen Moller博士がポスターに訪れ、私の説明を聞いた後に、「とても面白い研究だね」と仰って頂けたのはとても嬉しく、今後の研究を続けていく上でも励みになりました。

最後に、この度光栄にもExcellent Presentation Awardを頂きまして、学会関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。また、ご指導いただいた先生方、そして、研究に御協力頂いた患者様方には、この場を借りて深く御礼させて頂きたいと思います。これからより一層、研究活動に精進しまして、世界に向けて日本の神経精神薬理研究を発信できたらと思います。



Japan nightでの集合写真



David Nutt教授との写真

笠井 慎也

(公財) 東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Reduced supraspinal nociceptive responses and distinct gene expression profile in CXBH recombinant inbred mice

コメント

6月22日～26日にバンクーバーで開催されました第29回国際神経精神薬理学会（29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2014）に参加致しました。今回、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2014を授与下さいましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。学会、現地の様子など報告致します。

CINP2014は、今大会の大会長でCINP前理事長のAnthony G. Phillips先生の地元、カナダ、バンクーバーのコンベンションセンターで開催されました。訪れました6月下旬のバンクーバーは、気温が10～20℃程で湿度も低く、非常に過ごし易い気候でした。

今大会の特徴として、AD/HDに関するシンポジウムやワークショップが比較的多かったことが挙げられます。近年、AD/HDなど発達障害の認知度が高くなり、患者数も全世界的に増えていることから（過剰な診断によるとも言われています）、こういった社会状況を反映した結果なのかもしれません。また、TopicにPainが加わったことも今大会の特徴の一つと言えます。疼痛は精神疾患の中心的な病態ではありませんが、様々な精神疾患に付随して引き起こされることが報告されており、Topic登録に繋がったと思われる。今回の受賞研究も疼痛に関する研究でしたので、本研究が疼痛の理解と治療に繋がれば嬉しく思います。

本年4月にJSNPから頻用向精神薬の多軸分類法についてコメント依頼がありましたが、Nomenclatureタスクフォースのメンバーであり、依存性薬物のリスク分類でも著名なDavid Nutt先生と22日夜のJapan nightで話す機会を持ってました。CINPという国際会議でJapan nightを企画下さった橋本亮太先生、新田淳美先生に感謝しております。

今大会では日本から100名を超える参加者があり、ポスター発表でも多くの日本人の発表を見ました。CINP理事長、副理事長にそれぞれ山脇成人先生、齋藤利和先生が就任され、CINPにおける日本の存在感は非常に高まっていると感じました。一方で、シンポジウム等の座長は大半が欧米の研究者で占められており、欧米をリードする研究の必要性を感じました。今後は、自身の研究分野でシンポジウムも企画出来るよう研究に精進し、神経精神疾患の病態解明や治療法確立などに貢献していく所存です。

。